

赤ちゃんや幼児がいらっしゃる方へ

赤ちゃんや幼児をあずかっておられる保育士の方へ

災害後、お子さんにこんな症状はありませんか？

- ・ なかなか寝つかない、小さい物音にもびっくりする。
- ・ 見知らぬ場所(はじめての所)を極端にこわがる、心配そうにする。
- ・ 特定のものや場所(暗い所や狭い所)を極端にこわがる。
- ・ 特定の状況で機嫌がわるくなる。
- ・ 泣く元気もない(ミルクをのまない。なかなか食べようとしない)
- ・ しがみついて離れない、後追いが激しくなる。
- ・ これまで話せたことばが話せない。
- ・ 今までできていたことも出来なくなる。(一人で食べていたのに、食べさせてほしがる。トイレ一人で行けなくなった)
- ・ 甘えが強くなり、ぐずりやすい。わがままになる。
- ・ 悪夢を見ているようだ。うなされる。夜中に目を覚ましてぐずる。

これらの症状がある場合は、非常に強い恐怖の体験をしたときにおこる、心が混乱した状態です。

これを「急性ストレス障害」長期化すれば、「心的外傷後ストレス障害」といいます。

症状が非常に強い場合は専門の医療機関にご相談ください。(特に食べない、飲まない状態が強い場合には、脱水症状が生じ、点滴などの補液が必要となります。)

このリーフレットは、中国四国小児心身症学会(現日本小児心身医学会中国四国地方会)により平成13年3月の芸予地震の際に配布されたものです。

今回の災害にともなう心のケアのために地方会の許可を得て配布しています。

このリーフレットについてのお問い合わせ先(日本小児心身医学会中国四国地方会会長)

広島県立障害者療育支援センターわかば療育園 河野 政樹

〒739-0113 広島県東広島市八本松町米満 198-1

メールアドレス dr.kono@amwec.or.jp

あなたが、被害にあった子どもや家族の支えになろうとする場合、

次のような反応があることを理解することが大切です。

感情的な反応：

恐怖、怒り、罪責感、悲しみ、不安、うつ、感情がわからない、無力感、引きこもり(人に会いたくないなど)、感情の揺れ、記憶喪失、忘れやすさ、集中できない、いらいら、フラッシュバック(突然、災害の恐怖を思い出す)

身体的な反応：

頭痛、睡眠の障害、夜驚、過活動／寡活動、免疫力の低下、ストレスに関連する病気、食欲の障害

子どもや家族の周りにいるあなたに出来ることはたくさんあります！

- ・ あたたかい手をさしのべる。 ⇒ 孤独の感情を和らげてくれる
- ・ 子どもや保護者の話をしっかり聞いてあげる。
⇒自分に過去に同じ経験があってもそのことを話しすぎないようにする。
- ・ 忍耐強く、批判せずに聞くこと。
- ・ 自分の考えを押しつけず、いろいろな対処の方法を話す。
- ・ 「この経験を克服するように」とはけっして言わない。次第に順応し、受け入れることができるようにする。
- ・ この経験は人生を変える出来事になるかもしれないが、一生の一部のこととして受け入れられるように話す。
- ・ 子どもや家族の様々な感情を正しいとか間違いであるとか言わない。そのままに感じていいのだと安心させる。
- ・ 被害に遭った体験を誰かに訴えたり、助けを求めることが恥ずかしいことではないと話す。
- ・ 癒しの過程は、あなたが予想するよりももっと長くかかることを認識しておく。

言って良いことと言わない方が良いこと

「あなたのせいではない。」とか「気持ちはわかります。」と安易に言うことは、話したい気持ちを抑えてしまうこともあります。まずは、じっくりと話を聞くようにしましょう。」

【言った方が良いこと】

- ①このようなことがおこってお気の毒に思います。
- ②このような反応は、だれにでも起きる一般的なことです。そして、少しずつ気持ちは楽になります。
- ③こうしてお話して下さって嬉しく思います。
- ④もう安全です。(もし事実なら)
- ⑤前と同じにはならないでしょうが、今よりは良くなることができます。
- ⑥そんなことを経験して気が動転されたことでしょう。

【言わない方が良いこと】

- ①～でまだ運が良かったです。
- ②そのうち乗り越えられます。
- ③(配偶者や子ども)のために強くなりなさい。
- ④落ち着いてリラックスするように。
- ⑤説教っぽいこと。

気をつけていただきたいこと

- ・ なによりもまず「安心」できる雰囲気。
- ・ しっかりと子どもと向き合う。
- ・ 子どもの気持ちを理解してあげようと努力する。
- ・ 本人、家族の話をじっくりと聞く。
- ・ 受容、共感の基本中の基本。
- ・ 親を責めない。
- ・ 怒らない。
- ・ あわてない。
- ・ スキンシップも十分に。
- ・ 感情を表出してもらおうように努める。
- ・ 一人にしない。(子どもが一人で居たら声をかけて)
- ・ 「もう大丈夫」「心配ない」「何があっても必ず守ってあげる」「恥ずかしくない」これらは何回言っても有害ではない。
- ・ できることを一緒に考え、努力する。
- ・ 子ども、家族、サポートシステムについての情報を集め、伝えてあげる。